

学位論文題名

歌川広重『名所江戸百景』における遍在する視点

－メディア・近代・ジャポニスム－

学位論文内容の要旨

本論文は、江戸末期、歌川広重(1797-1858)による浮世絵風景版画『名所江戸百景』に見られる<遍在する視点>と、こうした視点が現れた時代的社会的背景をとりあげることによって、江戸末期における視覚性の変容と、情報化、近代化の問題について考察したものである。

『名所江戸百景』は、浮世絵風景画すなわち「名所絵」として、1856(安政 3)年から出版され始め、1858(安政 5)年の広重の急逝によって終わるシリーズであり、広重の没後に加えられた目録と、二代広重による作品 1 点を含む全 120 図からなる。本揃物は、日本の開国への過程と時を同じくして描かれた、江戸末期浮世絵の代表的作品であると同時に、近代化による変貌を目前にした当時世界最大規模の都市の一つ、江戸の姿を多角的に捉えた作品群でもある。

本揃物を構成する個々の版面に顕著に見られる特徴は、今日の B4 版ほどにすぎない縦長の紙の上にダイナミックに風景を展開する、広重の自由闊達な視点にある。広重の眼差しは、鑑賞者の目に成り代わり、百万都市江戸を疑似体験させる。ときには鑑賞者自らが風景の中に入り込み、その視野によって捉えた光景を再現したかのようにさえ見えるこれらの作品は、西欧に由来する透視遠近法を駆使しながらも、ルネサンス以降の西欧近代絵画における一点に固定された視点による客観性とは異なる、新たな視覚を実現させてゆく。本稿では、『名所江戸百景』における、風景空間のあらゆる位置に設定され、鑑賞者すべての目に成り代わるこうした視点を、「遍在する視点」と呼ぶ。

「遍在」という言葉は英語では“ubiquity”に置き換えられるが、今日用いられるユビキタスという語は、本来「キリストの恩寵の遍在」を含意する。しかし我々はこの語をその背景まで理解して用いているわけではない。同様に江戸の浮世絵師たちは、西欧近代の透視遠近法が含意していた象徴形式とは無関係に、この遠近法を用いつつ、新たな空間表象様式を生み出していった。

揃物としての『名所江戸百景』は、『東海道五拾三次』と比較して、必ずしも広重の傑作とはされてこなかった。しかし本論文では、『名所江戸百景』におけるこの「遍在する視点」こそが、ジャポニスムを通して西欧の絵画芸術のみならず、19 世紀後半というメディア技術の飛躍的な進歩の時代に、ポスター美術、写真など、当時のニュー・メディアに取り入れられ、その後今日の動画映像に至るまで、メディアの表現手法の動かしがたい一角をなしていったことを明らかにする。

この『名所江戸百景』の際立った特徴としては、かねてから以下のような問題が指摘されてきた。それは①良く知られた名所の見どころが、しばしば敢えて画角からはずされている。②江戸

名所とは言えないような街角や江戸周縁部の風景が多数取り上げられている。そして③揃物前半では鳥瞰の構図が多く見られ、これに対して後半では誇張された遠近表現、すなわち「近像型構図」が多用されることである。しかし作品の変化を構図ではなく視点という側面に注目してみると、①視点の高さは、鳥瞰から、人の目線、地面すれすれの高さへと自在に変化してゆく。また、②画面上を走査する鑑賞者の視線を、巧みに画中空間へと誘う心理的な仕掛けが工夫されてゆく。③さらに、近像型構図における近景のオブジェクトの大胆な断裁は、動画映像を思わせる動態の表現に繋がってゆく。しかしながら、揃物の発刊中に起きたこれらの視覚表現上の変化とその要因について、詳細に追究した論考はこれまでなかった。

本論文では、広重自身によって描かれた 118 点全ての作品を改印の順に並べ、描かれた風景主題と視覚表現上の変化を時系列的に、一点一点、綿密に検証してゆく。そこでまず注目されるのは、発刊の前年（安政 2 年 10 月）に江戸を襲った安政の大地震からの復興期における、祝賀的、発展的印象の作品群から、揃物後期、欧米列強による開国への圧力が強まる頃顕著になってゆく、不安定でドラマチックな画面への劇的変化である。視点に関して言えば、まず揃物初期には膨張する江戸の繁栄によって遠隔地へと広がった江戸名所を鳥瞰の視点によって広範囲に捉えた作品が多く見られ、これに対して後半部では、開国交渉という一触即発の危機的状況の中で、視点は地上に降下し、情報統制下、幕閣の動向を、様々な角度から覗き見ようとする庶民の眼差しを反映した作品も目につくようになる。同時に絵師は、鑑賞者を描かれた風景の中に巻き込みつつ、都市底辺に生きる人や生き物の日常を接写するようになる。これまで注目されてこなかった、揃物の半ばで現れる人の目線よりも低い視点もまた、本揃物における重要な転機をなしているのである。

これらの変化を明らかにすべく、全作品の分析は以下の方法で行なわれた。①描かれた場所に関わる当時の出来事を、安政大地震関連の幕府・民間資料、江戸庶民の日記や手記、及び江戸の歳時等に関わる調査結果と対照。②安政期の切絵図と今日の地図を照合し、当時の移動速度と距離感を実感するため、徒歩と自転車による現地調査を実施。④広重の視覚性の形成過程と当時の視覚文化（見世物、視覚玩具、挿絵本などの出版物）との関連を調査、検証。⑤それらを総合し、作品の特徴を、造形学、視覚心理学、メディア論的見地から詳細に分析。——以上の方法によって調査・分析・検討した結果、この『名所江戸百景』における斬新な視覚効果が、2 年半という発行期間の中で、広重による積極的、段階的な試みによって形成されていった過程が明らかになった。

個々の作品の制作を通して広重は、一歩ずつ近未来のメディア表現に向かう視覚の実験を繰り返している。そしてその変化は、視点と主観に関する日本と西洋の相違という極めて重要な問題を内包する。つまりこの「遍在する視点」には大きく三つの意味が含まれていた。まず一つ目には、本揃物では従来の名所絵としての企画意図のほか、時事的情報や告知という機能が期待されたため、今日で言うジャーナリズムや広報の視点が追究されていていったこと。二つ目には、この遍在する視点が、広重個人の発明に帰するものではなく、浮世絵風景画において、日本の絵巻や洛中洛外図などに見られる俯瞰の眼差し、中国山水画の空間表現、西欧の透視遠近法という、空間言語の多元的な混淆に由来するものであったこと。そして三つ目には、この視点の基層には、透視遠近法の根本原理としての絶対者の視点とは異なって、山川草木に神仏の霊が宿ると考えられていた日本における、多神教的世界観による多視点性があったことである。

各章の骨子は以下の通りである。第 1 章でまず、広重の視覚性の形成に関わる絵師としての成

長過程が時代背景とともに概観され、第 2 章では、『名所江戸百景』の描かれた時代、社会、文化的背景が広重の作品を変化させていった過程が、全作品の改印順に綿密に分析、検討される。そして第 3 章では、その結果を造形的、文化的観点から考察しつつ、『名所江戸百景』における遍在する視点の生成とその意義について考究し、『名所江戸百景』における広重という絵師の眼差しのあり方を通して、情報化、近代化、国際化に向かう江戸末期における、自己と他者、環境との関わりのあり方の、今日との相違と親縁性が、論じられる。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 大 平 具 彦

副 査 教 授 常 田 益 代

副 査 教 授 高 橋 吉 文

## 学 位 論 文 題 名

### 歌川広重『名所江戸百景』における遍在する視点

－メディア・近代・ジャポニスム－

本論文は、西洋近代絵画に対する浮世絵の影響の考察に専ら軸足を置いてきたこれまでのジャポニスム研究の枠組みを大きく越え、江戸末期の浮世絵の傑作『名所江戸百景』を生み出している歌川広重独自の「遍在する視点」について、その内的構造を歴史的文化的背景との関連で全作品（118点）にわたって実証的に綿密に分析するとともに、あわせて、西洋近代の遠近図法と日本の視覚表現との文明論的な比較考究、さらには江戸時代における「眼」と現代のメディア・テクノロジーの表現との連関性についてのメディア文化論的な論究を通じ、歌川広重の『名所江戸百景』に特徴的なこの眼差しを、近代における西洋と東洋の文化往還およびそこで展開した視覚の変容という世界大の構図において考察した注目すべき論考である。

公開口頭試問（平成21年1月27日実施）では、審査委員会から、本論文の独創性および学術的価値について、以下のような高い評価がなされた。

- ・『名所江戸百景』全体の作品分析については、これまでいくつかの先行研究例があるが、著者が現役のデザイナーであり、実作者という立場から、広重の制作プロセスが内的な構造の面から高い論証性のもとで新たに捉え直され、とりわけ、時系列にしたがい綿密な現地調査と実証的な時代考証のもとで作品全体を分析することによって、広重の「遍在する視点」の生成過程が説得力をもって明らかにされた。
- ・『名所江戸百景』が従来の風景絵図のような横絵ではなく、全作品が「縦絵」によって描かれているという一大特性が、広重の「遍在する視点」の生成プロセスおよびそれに基づく独自の空間表現のありようと緻密に関連づけられ、見事に検証されている。
- ・そしてそれを単に歌川広重あるいは浮世絵だけの表現として論じるのではなく、その独自の「遍在する視点」を西洋絵画の遠近図法と比較対応させて論じることによって、広重の視覚表現を、近代における視覚の構造的変容という世界的パースペクティブの中に位置づけることに成功している。

・また、そうした「遍在する視点」がしばしばカメラの眼あるいは映画の視空間と対比されるように、広重のヴィジュアルティ―の特性を、単にその時代だけにとどめず、後に世界的に展開する近代的な視覚メディアさらには現代のコンピューター視覚表現におけるメディア・テクノロジーとの時間的つながりの中で説得的に論じている。

ただ、上記の評価を踏まえつつも、一方では、下記のような問題点の指摘もあった。

・確かに、広重の「遍在する視点」も、その西洋絵画への影響も、作品分析を通して縦横に論じられているが、それはどちらかと言えば事象的に記述されがちであり、そうした特質がどのように成り立っていったかをもう少し構造的なレベルからも論じたならば、なお説得度が増したのではないか。

・それゆえ、後半部ではその「遍在する視点」が「生身の眼」というようなやや平板な表現に転化してしまっており、広重独自の視点をせっかくギブソンの生態学的視点と関連づけながらも、その点については十分に深められてはいない。今後の研究に期待したい。

・『名所江戸百景』においては、青（藍色、ブルー）によって描かれる「水」が主役であると思われるが、この点については論文の中でもいろいろ触れられてはいるものの、それが当時の安政の大地震と大火から立ち直ってゆく江戸庶民の鎮魂と関連しているのであれば、江戸の民の魂のありようとこの青色との結びつきについて、もっと述べてもよかったのではないか。

・西洋遠近法表現とカメラの眼との関連について、説明がやや不足していないか。（これについては、著者より、カメラの眼は、西洋遠近法を完成させつつ、そこには収まり切らない「外部」をも照らし出すものであるとの補足説明がなされた。）

以上のように、より深く展開されるべき点についていくつかの指摘はあったものの、それらは本論文の欠点というよりも、むしろ今後のさらなる研鑽への期待感の表明であると言ってよい。全体的に見るならば、すでに述べたように、歌川広重の『名所江戸百景』の全作品を綿密に分析することによって、広重独自の「遍在する視点」を19世紀後半における世界大の文化構造と視覚表現の中に位置づけ、かつそれを今日におけるメディア表現技術およびメディア文化のありようと関連づけた本論文の価値は非常に高く、これまでのジャポニスム研究に新たな地平を開くものである。

よって著者は、北海道大学博士（国際広報メディア）の学位を授与される資格があるものと認める。